

就学前児における非社会的遊びと社会的適応との関連

筑波大学大学院 (博) 人間総合科学研究科 大内 晶子

筑波大学心理学系 桜井 茂男

The relation between nonsocial play and social adjustment in preschool children

Akiko Ohuchi and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to classify nonsocial play behavior into three types (reticent behavior, solitary-passive behavior, and solitary-active behavior) and to examine the relations between these behavior types and social adjustment in preschool children. The participants were 54 preschool children (31 boys, 23 girls; mean age = 70.00 months, $SD = 3.37$ months) and their play behavior was classified into categories according to the Play Observation Scale (POS). The preschool teachers also rated the children in terms of their social competence and behavioral problems. Reticent behavior was positively related with cooperation-compliance, while a positive relation between solitary-passive behavior and apathy-withdrawal was only observed for girls. Moreover, solitary-active behavior was negatively related with interest-participation and positively related with behavioral problems.

Key words: preschool children, nonsocial play, social competence, behavioral problems

集団の中にいながら1人で遊んでいる子どもは、幼稚園や保育園で少なからず見られる。なぜ彼らが1人なのか、その行動が社会的にどんな意味を持つのか、という問いに答えるべく、これまで研究が行われてきた。

非社会的遊び (nonsocial play) とは、他に遊び可能な相手がいる状況にも関わらず行われる社会的相互作用の見られない遊び (Coplan, 2000)、と定義される。かつて、Parten (1932) が指摘したように、ひとり遊びは、2歳代では多く見られるが、加齢に伴って減少し、3、4歳頃には集団遊びが多くなることから、それ以降も多く見られる場合は、後の児童後期において、社会的不適応につながる可能性があるとする考えが主流であった。しかし、近年、社会的相互作用の欠如は、その子どもが社会的に不適応であると性格づけるための十分な基準ではないことが明らかにされている (Coplan, 2000)。

Colpan, Rubin, Fox, Calkins & Stewart (1994)

は、1人である時に何をしているか、という遊びの構成内容および認知的質の観点 (Smilansky, 1968) から、非社会的遊びを大きく3つの形態に分類した。その3つとは、沈黙行動 (reticent behavior)、ひとり静的行動 (solitary-passive behavior)、ひとり動的行動 (solitary-active behavior) である。その後の研究で、これら全てが必ずしも不適応と正の関連があるわけではないことや男女差があること (Coplan, Gavinski-Molina, Lagace-Seguin & Wichman, 2001)、感情的側面で違いがみられること (Coplan et al., 2001; 1994) などが明らかにされてきた。以下に、3つの行動形態の特徴と社会的適応との関連について述べる。

沈黙行動 沈黙行動は、友達が遊んでいるのを傍でじっと見ている行動 (傍観者の行動: onlooker behavior) と何をするのでもなくうろうろ歩き回ったり、ぼうっとしている行動 (何もしていない行動: unoccupied behavior) を指す (Coplan et al.,

1994). これは、社会的あるいは非社会的に新奇な状況に直面した時の用心深さを意味する「inhibition (抑制)」とほぼ同義のものとして定義されている (Asendorpf, 1991; Coplan et al., 1994). なお、子どもたちは、仲間との自由遊び時間のうち約10-15%で沈黙行動をしていることが報告されている (Rubin, Watson & Jambor, 1978).

社会的文脈としては、社会的恐怖や不安を反映する行動と考えられる。動機づけに関する観点からは、接近-回避葛藤の現れであるとして概念化されてきた (Asendorpf, 1991). すなわち、仲間に入りたくて望んでいるかもしれないが (接近動機づけ)、同時に、社会に対する恐怖や不安によって抑圧されてしまうために (回避動機づけ)、沈黙行動が現れると考えるのである。またその一方で、仲間から無視されている子どもに多く見られる行動であることも報告されている (Asendorpf, 1990; Gottman, 1977).

ひとり静的行動 ひとり静的行動は、何かを構成したり、作り出したりする目的のために、物体を操作する行動 (ひとり構成的遊び: solitary-constructive play) と、特定の物質的な特性についての情報を得るために、物体に焦点を当てて調べる行動 (ひとり探索的遊び: solitary-exploratory play) を指す (Rubin & Mills, 1988). この非社会的遊びの形態は、幼児期の自由遊びの中で非常によく (25-45%の時間) 見られるものである (Coplan, 2000; Rubin et al., 1978).

ひとり静的行動 (例えば、パズルをやったり、絵を描いたりすること) を頻繁に見せる子どもは、人よりも、物体に関心があるとされる (Jennings, 1975). こうした子どもは、物体に関心に向けた課題 (例えば、チケット配布、おもちゃの片付け) に優れていることが観察され、より課題に固執し、注意力が高いと報告されている (Coplan et al., 1994).

動機づけに関する観点からは、ひとり静的行動は、社会的なことに興味がなく、低接近動機づけと低回避動機づけの両方の徴候があるとされる (Rubin & Asendorpf, 1993). そのような動機づけシステムを持つ子どもは、社会的接触を持たずに1人で遊ぶことに満足するが、もし魅力的な社会的勧誘があれば、社会的な活動にも喜んで参加するかもしれない。

一般に、ひとり静的行動は、就学前においては社会的不適応の指標とは関連が見られていない (Coplan et al., 1994; Rubin, 1982). しかしながら、児童期中期、後期においては、仲間はずれ、内在化

した問題などとの関連を示すようになってくることも報告されている (Rubin & Mills, 1988).

ひとり動的行動 ひとり動的行動は、単に自分が生み出す肉体の感覚を楽しむために行なわれ、単純で繰り返しのある運動活動 (ひとり機能的遊び: solitary-functional play) と、誰か他の人物の役割を担ったり、マネごっこをしたり、動かないものに命を与えたりする遊び (ひとり劇的遊び: solitary-dramatic play) を指す (Rubin & Mills, 1988).

仲間がいるところでのひとり劇的遊びと、1人だけの状況でのひとり劇的遊びとは明確に区別されなくてはならない。なぜなら、後者は、幼い子どもには普通のことであるからである (例えば, Katz & Buchholz, 1999). また、ひとり動的行動は、自由遊びの時間、かなり稀に (自由遊び時間の約3-8%) 観察されるものである (Coplan et al., 1994; Rubin et al., 1978). Rubin (1982) は、このひとり遊びの形態は、仲間集団において、マイナスの目立ち方をするであろうと推測した。Rubin, LeMare & Lollis (1990) は、自ら仲間相互作用から引きこもる子どもがいる一方で、仲間集団から孤立させられている子どももいるようであることを報告している。このことから、ひとり動的行動が頻繁に観察される子どもは、後者の理由で非社会的行動をしているのかもしれない、と仮定することができる (Coplan, 2000). すなわち、こうした子どもは、適切な社会的相互作用を起し、それを維持する能力に欠けているので、仲間から拒絶され、その結果として、ひとり動的行動に逃れているのかもしれないと考えられる。実際、ひとり動的行動は、外在化した問題 (特に攻撃)、仲間からの拒否と関連があることが報告されている (Coplan et al., 1994; Rubin, 1982; Rubin, 1986).

非社会的遊びにおける性差 Coplan et al. (2001) は、非社会的遊びと社会的適応 (行動問題、社会的コンピテンス、学力) との間の関連に性差が存在するかどうか検討した。その結果、沈黙行動においては見られなかったものの、ひとり静的行動とひとり動的行動においては性差が存在することが明らかとなった。ひとり静的行動の多い子どものうち、男子は社会的コンピテンスと学力がそれぞれ低かったが、女子は学力が高いことが示された。また、ひとり動的行動の見られた女子は、それが全く見られなかった女子と比べて、外に現れる問題行動が多かった。このような結果から、同じ非社会的遊びであっても、男女によって異なる関連が見られる可能性が考えられる。

ここまで概観してきたような非社会的遊びに関す

る研究は、わが国において、これまでほとんどなされてこなかった。よって、本研究では、まず、Rubin (1986) の遊び観察尺度 (Play Observation Scale; POS) を用いて、幼稚園・保育園における遊びの実態を探ることを第1の目的とする。ここでは特に、幼稚園に通う就学前児、すなわち5、6歳児を対象とし、小学校入学を控え、発達のにも1人で遊ぶことが少なくなるとされる年齢において、どのような非社会的遊びが見られるのかに注目する。

次に、POS から得られた非社会的遊びの出現率を利用して、非社会的遊びと社会的適応との関連を見ていくことを第2の目的とする。本研究では、社会的コンピテンスと行動問題という2つの側面から、社会的適応との関連を探索的に検討する。その際、Coplan et al. (2001) の方法を用いることで、彼らの研究で見られたような性差が存在するかどうかについても検討する。

方 法

調査対象 茨城県内の幼稚園年長児35名 (男児21名, 女児14名), 保育園年長児19名 (男児10名, 女児9名) の合計54名 (男児31名, 女児23名; 平均月齢70.00ヶ月, *SD*3.37ヶ月) と, クラス担任の幼稚園・保育園教諭各1名。

調査時期 2002年7月。

調査内容

(1) **子どもの非社会的遊び** 自由遊び中の子どもの行動をビデオカメラによって撮影し、遊び観察尺度 (POS) (Rubin, 1986) を用いて符号化した。

子どもの行動観察: 実際の観察をはじめの前に、子どもを観察者に慣れさせること、観察者が子どもの名前と顔を一致させることを目的として、対象となる子どもを一人一人カメラで撮影した。遊びの場は屋外であり、午前あるいは午後の自由遊びの時間に行った。それぞれの子どもを、1日に4~5分間ずつ、異なる3日間に分けて合計12分間記録した。その日に観察する子どもは、ランダムに選出した。ビデオの撮影は、筆者と1名の協力者 (全観察で合計6名の協力者) によって、最大で2台のビデオカメラをまわして行われた。撮影においては、本児に自分が撮影されていると気づかれない程度に距離をおくこと、万一、気づかれて遊びが中断されることがあった場合は、一度撮影を中断することとした。撮影は、合計11日間実施された。

得点の算出: 遊び観察尺度 (POS) を用いて、撮影したビデオテープを見ながら、10秒を1インターバルとするタイム・サンプリング法を行った。10秒

間 (1インターバル) で見られた代表的な行動について、遊び観察尺度の中から、その行動の属するカテゴリーを1つ選び、これを1得点とした。その結果、1人につき合計72インターバルを符号化し、カテゴリーごとに合計得点を算出した。その後、合計得点を72で割ることで、観察時間中にどのくらいの割合でその行動が見られたのか、出現率を算出した。よって、この出現率は、0.00-1.00の範囲で表される。

さらに、本研究では、非社会的遊び得点を算出するため、「沈黙行動」は何もしていない行動と傍観者の行動、「ひとり静的行動」はひとり構成的遊びとひとり探索的遊び、「ひとり動的行動」はひとり機能的遊びとひとり劇的遊びの出現率をそれぞれ合計した。

観察者間信頼性の検討: 本研究の行動の符号化は、筆者1人で全て行った。その信頼性を検討するため、全体の約15%を、1名の協力者によって符号化してもらい、一致の指標 (Martin & Bateson, 1993) を算出した。これは、観察者間で一致したインターバル数を、総インターバル数で割って算出したものである。その結果、一致率は87.64%であった。

(2) **子どもの社会的適応** 子どもの社会的適応をみるために、幼稚園・保育園の担任教諭に対して質問紙調査を行った。質問紙は、Kohn & Rosman (1972) の Social Competence Scale and Symptom Checklist を筆者が日本語に翻訳して使用した。この尺度は、社会的コンピテンスを測定する10項目と、保育場面で現れる臨床的な症候 (symptom) を測定する10項目の合計20項目から構成されていた。ここでの臨床的な症候に関する項目の内容は、行動問題に関する内容とも解釈できるため、これ以降は、「行動問題」と呼ぶことにする¹⁾。また、この尺度が筆者の考える社会的適応を示すものであるかどうかを確かめるため、チェック項目として、「友だちに人気がある」、「友だちと仲良くできる」、「先生に信頼されている」、「集団行動が得意だ」の4項目を加えた。よって、合計24項目となった。回答形式は3段階評定 (1. ほとんどあてはまらない, 2. どちらともいえない, 3. よくあてはまる) であった。

質問紙には子どもの名前を記入し、担任教諭に配布した。自由な時間に回答してもらい、1週間後に回収した。

1) 元尺度は「Apathy-Withdrawal」と「Anger-Defiance」の2つの下位尺度から構成されていた。項目内容については結果と考察で詳述する。

結果と考察

1. 自由遊び場面における非社会的遊びの実態

沈黙行動、ひとり静的行動、ひとり動的行動という3つの非社会的遊びの出現率について、男子、女子、全体（男子と女子の合計）の平均、標準偏差、範囲をTable 1に示した。また、男女の平均の差をみるために、*t*検定を行った（Table 1参照）。

沈黙行動：友達が遊んでいるのを傍でじっと見ている行動（傍観者の行動）、何をするのでもなくイスに座っている行動（何もしていない行動）などがここに分類された。沈黙行動が全く見られなかったのは4名のみであった。54名中の34名すなわち全体の63%の子どもが、0.01以上0.2未満の低い出現率で沈黙行動を見せていた。2名のみ、高い出現率（.67, .75）で沈黙行動が見られた。また、男女間で平均の差は見られなかった。分布に関しても、男女で大きな違いは見られなかった。

ひとり静的行動：1人でのトンボ捕りやダンゴ虫集め（ひとり探索的行動）、1人での砂場遊びや折り紙（ひとり構成的行動）などがここに分類された。全体として観察された回数は非常に少なかった。17名はひとり静的行動が全く見られなかった。ひとり静的行動が見られた子どもでも、そのほとんどは、0.2未満という低い出現率であった。3名のみ、.43, .56, .60という比較的高い出現率を示した。また、男女間で差は見られなかった。分布に関しても、男女ともほぼ同じ分布であった。

ひとり動的行動：1人でブランコに乗る、滑り台をすべる、水たまりの中を歩く、輪を投げたり回したりする、ルールのないボール遊びをする（以上、ひとり機能的行動）、お店屋さんになったフリをして1人で声をあげて歩く（ひとり劇的行動）などがここに分類された。9名はひとり動的行動が全く見

られなかった。36名すなわち約66%の子どもが、0.01以上0.2未満という低い出現率であった。3名のみ、.36, .56, .58という比較的高い出現率を示した。*t*検定の結果、女子の平均に比べて男子のそれが有意に高かった（ $t = 2.42, df = 52, p < .05$ ）。分布を見ても、女子はひとり動的行動を見せた子どもが少なく、高い出現率を示したのはすべて男子であった。

3種類の非社会的遊び間の関連：3つの非社会的遊び間の関連を見るため、相関係数を算出した。その結果、どの非社会的遊びの間にも、有意な相関は見られなかった。

以上の結果から、5-6歳の就学前児において、沈黙行動は、頻度は高くはないにしてもほとんどの子どもに見られる行動であること、一方、ひとり静的行動とひとり動的行動は、特定の子どものみで見られる行動であることが推測された。すなわち、沈黙行動は、その行動が見られること自体は、特別なことではないと考えられる。ただし、その頻度の範囲は広く、どのくらいの頻度で見られるか、という量的な差は考慮に入れる必要がある。一方、ひとり静的行動とひとり動的行動は、全く、あるいはほとんど見られない子どもが多かった。ひとり動的行動に関しては、男子に多く見られた。こうした行動を見せる子どもは、何らかの特徴を持つ可能性があることを示唆するものと考えられる。

また、本研究では、従来の報告（例えば、Coplan et al., 2001）と比較して、静的行動が少なく、動的行動が多い傾向にあった。これには、環境的な要因が考えられる。従来の研究のほとんどは、屋内で観察が行われていたが、本研究では屋外であった。すなわち、屋外での遊びにおいては、静的行動は少なく、動的行動は多くなる可能性が考えられる。実際に、遊びの場が屋内であるか屋外である

Table 1 非社会的遊びの平均、標準偏差、範囲、および性差

	男子	女子	全体	性差 (<i>t</i> 値)
沈黙行動	.16	.17	.17	.15
	.15	.17	.16	
	.00-.67	.00-.75	.00-.75	
ひとり静的行動	.08	.05	.07	.75
	.13	.11	.13	
	.00-.60	.00-.56	.00-.60	
ひとり動的行動	.14	.06	.11	2.42*
	.14	.07	.13	
	.00-.58	.00-.24	.00-.58	

Note. 上段は平均、中段は標準偏差、下段は範囲。

* $p < .05$.

か、遊びに使うことのできる設備の性質がどうか（動かせるか、動かせないかなど）によって、観察される遊びの種類が異なることが報告されてきている（例えば、Blurton Jones, 1972; Roper & Hinde, 1978）。

このように、3つの非社会的遊びがそれぞれ異なる現れ方をしたことは、非社会的遊びが一元的にはなく、その行動、感情、動機などの質によって区別して捉えられるべきである、とするこれまでの主張を支持する結果であると言える。また、非社会的遊びの間に有意な相関が見られなかったことも、同様のことを示す結果として考えられる。そしてこのことは、以降で行う非社会的遊びと社会的適応との関連の検討において、それぞれ異なる関連を示す可能性を示唆するものである。

2. 非社会的遊びと社会的適応との関連

(1) 社会的適応尺度の検討

因子分析：想定した因子が見られるかどうかを確認するため、因子分析を行った。社会的コンピテンスの10項目と行動問題の10項目に関して、それぞれ最尤法により2因子を抽出し、プロマックス回転を行った。その結果は、Table 2とTable 3に示す。

各因子について、元尺度にならって因子名をつけた。社会的コンピテンスの因子Iは、「2. 他人がしていることを邪魔する（逆転項目）」、「17. ルールや規則を守る。」などの項目が高く負荷して

いたので、「協同・従順」と命名した。因子IIは、「1. 自分がしていることに、他の子の興味を向かせる。」、「11. 友達のかえに賛成するだけでなく、自分の考えも伝えることができる。」などの項目が高く負荷していたので、「興味・参加」と命名した。行動問題の因子Iは、「14. 怒ったり、イライラしたり、欲求不満になると、叫び声をあげたり、ものを叩いたりする。」などの項目が高く負荷していたので、「怒り・反抗的態度」と命名した。因子IIは、「8. 他の子どもと遊ぶことができない。」、「13. 促されないと活動に参加できない。」などの項目が高く負荷していたので、「無関心・引っ込み思案」と命名した。社会的コンピテンス、行動問題の項目とも、元尺度と同じ2因子が認められた。このことから、本研究で使用した社会的適応尺度の因子的妥当性は確認されたと言える。したがって、それぞれの因子に高い負荷を示した項目によって下位尺度を構成した。

信頼性の検討：それぞれの下位尺度の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、興味・参加では.77、協同・従順では.85、無関心・引っ込み思案では.73、怒り・反抗的態度では.86であった。よって、高い内的一貫性が確認された。

記述統計量：社会的適応の4つの下位尺度について、記述統計量をTable 4に示す。男女の平均の差を見るために t 検定を行った結果、協同・従順にお

Table 2 社会的コンピテンス尺度の因子分析結果

質問項目	抽出因子	
	I	II
I. 協同・従順 ($\alpha = .85$)		
2. 他人がしていることを邪魔する。	.89	-.10
12. 他の子どもに対し、敵対的で攻撃的である（からかう、なじる、いじめる、など）。	.88	-.23
7. 教師の定めたルールや規則に対し、あからさまに反抗する。	.85	-.01
17. ルールや規則を守る。	.63	.17
22. 教師の指示にすぐに従う。	.47	.32
II. 興味・参加 ($\alpha = .77$)		
11. 友達のかえに賛成するだけでなく、自分の考えも伝えることができる。	-.03	.79
1. 自分がしていることに、他の子の興味を向かせる。	-.30	.67
21. 他の子どもに指示してもらったり、活動をまとめてもらったりしないと、どうしたらよいか困ってしまう。	-.01	.63
6. 作業や遊びに対して強い興味を示す。	.15	.62
16. 自分の周囲の物事や活動に対する興味をほとんど示さない。	.28	.55
因子間相関		
	I	-.12
	II	-

Note. 項目番号の__は逆転項目を示す。

いて、女子の方が有意に得点が高く ($t=2.40$, $df=52$, $p<.05$), 怒り・反抗的態度においては、有意傾向ではあるが男子の方が得点が高かった ($t=1.82$, $df=52$, $p<.10$). すなわち、女子はより協同・従順的であり、男子はより反抗的態度が多い傾向にあった。

下位尺度間の関連: 社会的適応の下位尺度間の関連をみるために、相関係数を算出した。その結果を Table 5 に示す。興味・参加と無関心・引っこみ思案の間に負の相関 ($r=-.68$, $p<.01$) が、協同・従順と無関心・引っこみ思案、怒り・反抗的態度の間にそれぞれ負の相関 (順に、 $r=-.31$, $p<$

$.05$; $r=-.78$, $p<.01$) が、無関心・引っこみ思案と怒り・挑戦的態度の間に正の相関 ($r=.35$, $p<.01$) 見られた。

また、社会的適応の4つの下位尺度と、筆者の作成した適応チェック項目群 ($\alpha=.76$) の間の相関を見た。その結果を Table 5 に示す。社会的コンピテンスの興味・参加、協同・従順においてはそれぞれ正の相関 (順に、 $r=.71$, $p<.001$; $r=.56$, $p<.001$) が、行動問題の無関心・引っこみ思案、怒り・反抗的態度においては、それぞれ負の相関 (順に、 $r=-.65$, $p<.001$; $r=-.52$, $p<.001$) が見られた。よって、この尺度は、筆者の考える社

Table 3 行動問題尺度の因子分析結果

質問項目	抽出因子	
	I	II
I. 怒り・挑戦的態度 ($\alpha=.86$)		
24. 大人に話しかけられた時は、それが優しい態度であっても (怒られるのではなく)、怒ったり、イライラしたりする。	.90	-.26
4. 日常生活のすべきことをするために (罰としてでなく) 大人に遊びを中断される時、腹を立てる。	.84	.05
14. 怒ったり、イライラしたり、欲求不満になると、叫び声をあげたり、ものを叩いたりする。	.76	.21
9. 他の子どもにわざと残酷に接する (他の子どもをいじめたり、なぐったり、からんだりする)。	.74	.09
19. 大人の指示や命令に従おうとしない (大人に「口ごたえする」)。	.74	-.09
II. 無関心・引っこみ思案 ($\alpha=.72$)		
8. 他の子どもと遊ぶことができない。	.03	.99
3. 一人である (打ち解けない、よそよそしい)。	-.02	.67
13. 促されないと活動に参加できない。	.10	.51
18. 悲しそううつむいた表情で、重々しい様子で、めったに笑わない。	-.24	.48
23. ぼんやりと空を見つめている。	.24	.32
因子間相関		
	I	.35
	II	—

Table 4 社会的適応下位尺度の平均、標準偏差、および性差

	男子	女子	全体	性差 (t 値)
協同・従順	2.43 (.55)	2.74 (.35)	2.56 (.50)	2.40*
興味・参加	2.17 (.55)	2.36 (.40)	2.25 (.50)	1.39*
怒り・反抗的態度	1.25 (.48)	1.05 (.14)	1.16 (.39)	1.82'
無関心・引っこみ思案	1.37 (.36)	1.24 (.29)	1.31 (.34)	1.35

Note. () 内は標準偏差である。' $p<.10$, * $p<.05$.

会的適応を測定するものであると判断できる。

(2) 非社会的遊びが社会的適応に与える影響と性差の検討

3つの非社会的遊びと4つの社会的適応の関連を見るために、相関係数を算出した。なお、非社会的遊びの得点には分布に偏りが見られたため、対数変換をして使用した（以下の分析においても同様である）。その結果を Table 6 に示す。沈黙行動と協同・従順の間には正の相関が見られた ($r = .24, p < .10$)。ひとり静的行動と社会的適応の下位尺度の間に有意な相関は見られなかった。ひとり動的行動においては、興味・参加との間に負の相関 ($r = -.35, p < .01$) が、怒り・反抗的態度、無関心・引っ込み思案という2つの問題行動の指標それぞれとの間に正の相関（順に、 $r = .32, p < .01$; $r = .43, p < .01$) が見られた。

次に、社会的適応の4つの下位尺度を従属変数と

して、3つの非社会的行動と性別の主効果、および性との交互作用を見るため、Coplan et al. (2001)の方法にならって階層的重回帰分析を行った。社会的適応の4つの下位尺度を従属変数とし、それぞれに対する独立変数として、ステップ1では非社会的遊びの一つの形態（例えば、沈黙行動）と性別を投入し、ステップ2ではその非社会的遊びと性別の2要因の交互作用として、この積（例えば、沈黙行動×性別）を投入した。

この結果は Table 7 - Table 9 に示した。沈黙行動は、協同・従順に正の影響 ($\beta = .24, p < .10$) を与えていた。ひとり静的行動からの有意な影響は見られなかった。ひとり動的行動は、興味・参加に負の影響 ($\beta = -.33, p < .05$) を、怒り・反抗的態度、無関心・引っ込み思案にそれぞれ正の影響（順に、 $\beta = .27, p < .10$; $\beta = .42, p < .01$) を与えていた。交互作用では、ひとり静的行動×性別が、

Table 5 社会的適応下位尺度間の相関係数

	協同・従順	興味・参加	怒り・反抗的態度	無関心・引っ込み思案	適応チェック項目群
協同・従順	—	.17	-.78**	-.31*	.56***
興味・参加		—	-.16	-.68**	.71***
怒り・反抗的態度			—	.35**	-.52***
無関心・引っ込み思案				—	-.65***

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

Table 6 非社会的遊びと社会的適応の下位尺度の相関係数

	沈黙行動	ひとり静的行動	ひとり動的行動
協同・従順	.24 [†]	.05	-.14
興味・参加	-.00	-.21	-.35**
怒り・反抗的態度	-.20	.00	.32**
無関心・引っ込み思案	-.01	.18	.43**

Note. [†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

Table 7 沈黙行動が社会的適応に与える影響についての階層的重回帰分析の結果

	協同・従順	興味・参加	怒り・反抗的態度	無関心・引っ込み思案
ステップ1				
沈黙行動	.24 [†]	-.00	-.19	-.01
性別	.31*	.19	-.24 [†]	-.19
ステップ2				
沈黙行動×性別	-.11	.32	.33	-.26
R ² _{total}	.16*	.05	.11	.04

Note. [†] $p < .10$, * $p < .05$.

Table 8 ひとり静的行動が社会的適応に与える影響についての階層的重回帰分析の結果

	協同・従順	興味・参加	怒り・ 反抗的態度	無関心・ 引っ込み思案
ステップ1				
ひとり静的行動	.09	-.19	-.03	.16
性別	.33*	.17	-.25†	-.17
ステップ2				
ひとり静的行動×性別	.04	-.01	.23	.85*
R ² _{total}	.11	.07	.07	.14†

Note. † $p < .10$, * $p < .05$.

Table 9 ひとり動的行動が社会的適応に与える影響についての階層的重回帰分析の結果

	協同・従順	興味・参加	怒り・ 反抗的態度	無関心・ 引っ込み思案
ステップ1				
ひとり動的行動	-.04	-.33*	.27†	.42**
性別	.30*	.08	-.16	-.05
ステップ2				
ひとり動的行動×性別	.27	-.30	-.47	.28
R ² _{total}	.11	.14†	.15*	.20*

Note. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

無関心・引っ込み思案に対して有意であった。そこで、無関心・引っ込み思案とひとり静的行動の男女別の相関を見たところ、女子において有意な正の相関 ($r = .58, p < .01$) が見られた。

以上の結果から、沈黙行動の多い子どもは、協同・従順である傾向が示唆された。これは、沈黙行動の多い子どもは、自分から他者への働きかけの少ない、いわゆる「大人しい」子どもとして認知されやすいことが影響していると考えられる。つまり、自分から積極的に行動を起こすことはなくても、教師や友人に言われたことに従って行動できれば、教師によって、協同・従順であると評価されるのではないかと考えるのである。また、もしそうであるならば、教師は、大人しく受動的な子どものことを、言うことを聞く良い子としてプラスの評価をする傾向があることも推測されうる。

ひとり静的行動は、全体では何も影響は見られなかったが、女子に限った場合、この行動の多い子どもは、無関心・引っ込み思案である傾向がみられた。このことから、1人でじっと砂場で遊んだり、何かを探索している女子は、仲間に関心がない、仲間に入っていけないといった内面的な問題を抱えていることが考えられる。人間関係に無関心という点では、ひとり静的行動を「人よりも物体に興味があ

るゆえの行動 (Jennings, 1975)」とする従来の捉え方に近いと言えるが、わが国では、集団に参加することができないという不適応的な側面がより強調される行動なのかもしれない。また、Coplan et al. (2001) の結果では、男子においてこの傾向が見られており、本研究の結果とは反対であった。これに関しては、普段、女子は、静的遊びを集団で行う場面が多く見られるために、1人でそれを行っている子どもを見ると、特に不適応的に受けとめられるのではないだろうか。しかし、これはあくまで筆者の考えであるため、男女の集団遊びの傾向についても、今後、新しい調査の余地があると言えよう。

ひとり動的行動の多い子どもは、社会的コンピテンスである興味・参加について低く評価され、無関心・引っ込み思案と怒り・反抗的態度という二つの行動問題が見られると評価される傾向にあった。このことは、ひとり動的行動の多い子どもが、男女を問わず社会的に不適応であることを示唆する結果であるといえる。この結果は、これまでの研究結果 (Coplan et al., 2001; Coplan et al., 1994; Rubin, 1982; Rubin & Mills, 1988) と一致する。特に本研究において、具体的に、仲間の活動に興味を示したり、参加したりする能力に欠ける点が明らかになったことは、こうした子どもが、適切な社会的相互作用

用を起し、それを維持する能力に欠けるとする、これまでの考え（例えば、Coplan et al., 2001）を支持するものと言える。また、行動問題に関しては、無関心・引込み思案という内面的な問題と、怒り・反抗的態度という外に現れる問題の二つの側面に影響を与えていた。これは、これまでの研究で報告されてきた、乱暴な遊びの出現、外在化した問題（特に攻撃性）の指標といった、外に現れる問題との関連（Coplan et al., 1994; Rubin, 1982; Rubin & Mills, 1988）を支持するだけでなく、内面的な問題との関連も付け加える結果となった。1人で体を動かすひとり動的行動は、目立ちやすい行動であるため、とかく外に現れる問題との関連を指摘されやすい。しかし、本当は仲間に入りたいのであるが、そのような行動をとることでしか、周囲の興味を自分に向けることができずにいるのかもしれない。それゆえ、結果的には、ますます友達を自分から遠ざけることになり、孤立を深めることになるとも考えられる。

以上の結果より、3つの非社会的遊びの形態は、社会的適応に異なる影響を与えることが明らかとなった。また、この影響における性差は、ひとり静的行動と無関心・引込み思案の関係においてしか見られなかった。しかし、社会的適応についての教師の評価に関しては、協同・従順は女子が高く評価され、怒り・反抗的態度は男子が高く評価されるという性差が存在した。これは、女子は協同・従順的であり、男子は反抗的であるとする性スキーマが、教師の中に存在しているせいかもしれない。もしそうであるならば、ある子どもが適応的か不適応的かを教師が評価する際、その子が男子であるか女子であるかによって、基準が異なる可能性も考慮しなければならないであろう。

まとめと今後の課題

本研究の主な目的は、仲間集団の中において一人で遊んでいる行動（非社会的遊び）を、その行動の内容から3つに分類し、社会的適応との関連を検討することであった。

まず、幼稚園・保育園の自由遊び場面で子どもを観察し、遊び観察尺度（Rubin, 1986）を用いてカテゴリに分類した。その結果、沈黙行動は、出現率は高くないにしても、ほとんどの子どもに見られたのに対し、ひとり静的行動とひとり動的行動は、沈黙行動と比較して全く見られない子どもも多く、特定の子どものみで見られる行動であることが示唆された。

次に、3つの非社会的遊びが社会的適応の指標にどのような影響を与えるのか、また、そこに性差が存在するのかについて検討した。その結果、沈黙行動の多い子どもは、協同・従順である傾向にあった。ひとり静的行動の多い子どもは、全体では何も影響は見られなかったが、女子に限った場合、無関心・引込み思案である傾向にあった。ひとり動的行動の多い子どもは、社会的コンピテンスである興味・参加が低く、怒り・反抗的態度と無関心・引込み思案という2つの行動問題が見られる傾向にあった。

今後の課題は以下のとおりである。

遊びの観察の環境：今回の観察は、協力していただいた幼稚園・保育園の方針から、全て屋外において行われた。先にも述べたように、従来の研究のほとんどは屋内で行われており、もしその環境の違いによって、3つの非社会的遊びの現れる頻度に今回の違いが生じたのであればとすれば、今後は、同じ屋内の環境で観察を行ってみる必要があると考える。

非社会的遊びと社会的適応の関連の妥当性：関連の見られた社会的適応の指標においては、これまでの研究とは異なる結果も見られた。この点については、さらに妥当性を検討する必要がある。また、社会的適応の評価をする教諭の教育観（例えば、一人で遊ぶ子どもをどのように考え、対応しているのか、など）について調査を行うことも、今回の結果を説明する上で有効であろう。

性差の検討：本研究では、Coplan et al. (2001)の報告を受けて、性差についての検討も行った。非社会的遊びと社会的適応のそれぞれの下位尺度においては、いくつか性差が見られたが、非社会的遊びと社会的適応との関連については、性差はほとんど見られなかった（ひとり静的行動と無関心・引込み思案の間のみ見られた）。性差の中で、男子は女子よりもひとり動的行動が多く、行動問題である怒り・反抗的態度が高い傾向にあったこと、女子は男子よりも社会的コンピテンスにおいて、協同・従順が高く評価される傾向にあったことは興味深い。本研究の目的と直接関係はないが、5、6歳児における、男の子らしさ、女の子らしさが現れた結果であるといえるのではないだろうか。そうであるならば、両親や教師は、どのような遊びがそれぞれの性について望ましいと思っているのか、それが非社会的遊びと社会的適応の関連に影響するのかについて検討することも、今後必要であると考えられる。

発達的变化：本研究は、5-6歳の年齢の子どもを対象をしばって行った。これは、幼稚園・保育園での生活にも慣れ、次年度には小学校への入学を控

えた子どもにおいて、非社会的遊びはどのように現れ、社会的適応にどのような影響を与えるかを探るためであった。非社会的遊びの頻度は、年齢の増加とともに減少するという従来の報告 (Parten, 1932) を考えると、予想よりも若干多い印象を受けた。また、就学前児のひとり静的行動は、社会的不適応の指標とは関連がないが (Coplan & Rubin, 1998; Coplan et al., 1994)、就学後の児童期中期、後期においては、次第に不適応的になる (Rubin & Mills, 1988) ことも指摘されている。にもかかわらず、本研究でのひとり静的行動は、女子だけではあるが、不適応の指標との関連がみられた。これは、わが国ではすでに就学前において、ひとり静的行動は不適応的であると見なされている可能性が考えられる。よって、5-6歳以前の子どもにおいても、今回と同様の調査を行い、どのような発達の変化が見られるのかについて検討する必要がある。

引用文献

- Asendorpf, J.B. 1990 Development of inhibition during childhood: Evidence for situational specificity and a two-factor model. *Developmental Psychology*, 26, 720-730.
- Asendorpf, J.B. 1991 Development of inhibited children's coping with unfamiliarity. *Child Development*, 62, 1460-1474.
- Blurton, J.N. 1972 Categories of child-child interaction. In N. Blurton Jones (Ed.), *Ethological studies of child behavior*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coplan, R.J. 2000 Assessing nonsocial play in early childhood: Conceptual and methodological approaches. In K. Gitlin-Weiner, A. Sandgrund & C. Schaefer (Eds.), *Play diagnosis and assessment* (2nd ed., pp.563-598). New York: Wiley.
- Coplan, R.J., Rubin, K.H., Fox, N.A., Calkins, S.D. & Stewart, S.L. 1994 Being alone, and acting alone: Distinguishing among reticence and passive and active solitude in young children. *Child Development*, 65, 129-137.
- Coplan, R.J., Gavinski-Molina, M., Lagacé-Séguin, D.G. & Wichmann, C. 2001 When girls versus boys play alone: Nonsocial play and adjustment in kindergarten. *Developmental Psychology*, 37, 464-474.
- Gottman, J.M. 1977 Toward definition of social isolation in children. *Child Development*, 48, 513-517.
- Jennings, K.D. 1975 People versus object orientation, social behavior, and intellectual abilities in preschool children. *Developmental Psychology*, 11, 511-519.
- Katz, J.C. & Buchholz, E.S. 1999 "I did it myself": The necessity of solo play for Preschoolers. *Early Child Development and Care*, 155, 39-50.
- Kohn, M. & Rosman, B.L. 1972 A Social competence scale and symptom checklist for the preschool child: Factor dimensions, their cross-instrument generality, and longitudinal persistence. *Developmental Psychology*, 6, 430-444.
- Martin, P. & Bateson, P. 1993 *Measuring behavior*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Parten, M.B. 1932 Social Participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269.
- Roper, R. & Hinde, R.A. 1978 Social behavior in a play group: Consistency and complexity. *Child Development*, 49, 570-579.
- Rubin, K.H. 1982 Nonsocial play in preschoolers: Necessarily evil? *Child Development*, 53, 651-657.
- Rubin, K.H. 1986 Play, peer interaction, and social development. In A.W. Gottfried & C.C. Brown (Eds.), *Play interaction: The contribution of play materials and parental involvement to children's development*. Lexington Books.
- Rubin, K.H. & Asendorpf, J.B. 1993 Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood: Conceptual and definitional issues. In K.H. Rubin & J.B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood* (pp.3-17). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Rubin, K.H., LeMare, L.J. & Lollis, S. 1990 Social withdrawal in childhood: Developmental pathways to rejection. In S.R. Asher & J.D. Coie (Eds.), *Peer Rejection in Childhood* (pp.217-249). New York: Cambridge University Press. 第8章 児童期の社会的引込み思案：仲間による拒否への発達の道すじ 山崎 晃・中澤 潤 (監訳) 1996 子どもと仲間の心理学：友だちを拒否するところ (pp.214-244) 北大路書房.
- Rubin, K.H. & Mills, R.S.L. 1988 The many faces of social isolation in childhood. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 6, 916-924.
- Rubin, K.H., Watson, K.S. & Jambor, T.W. 1978

Free-play behaviors in preschool and kindergarten children. *Child Development*, **49**, 534-536.
Smilansky, S. 1968 *The effects of sociodramatic play*

on disadvantaged preschool children. New York: Wiley.

(受稿 3 月 22 日：受理 5 月 31 日)